

平成 30 年 5 月 19 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04250

研究課題名(和文) 新任期における教師の成長のナラティブスタディ-生きられた経験としてのカリキュラム

研究課題名(英文) Experience and Growth among Young Teachers during their Early Days: The Lived Curriculum

研究代表者

桂 直美 (KATSURA, Naomi)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：50225603

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現在初任期を生きている教師の語りの分析を通して、若手教師の初任期中における経験と成長の様相をとらえることを目的とした。クランディニンのナラティブ・インクワイアリーの方法に基づき、個々の教師と信頼に基づいた関係を保つ研究者が、子ども時代から今日までのライフストーリーを聞いた。またほぼ一年後に教師同士が共に語りあえる場を設定し、経験の語り直しに互いに耳を傾けた。語り直しにおいては、以前には言語化されなかった内容の新たな言葉でのとらえ直しが示され、省察の深まりが示された。また教師像・学級像のとらえ直しや、自己理解といったものも、こうした協同のナラティブの場において深められることがわかった。

研究成果の概要(英文)： This research aims at understanding and elucidating the experience and growth of novice teachers: how they experience their early days and how their growth unfolds. Drawing upon the "Narrative Inquiry" by D. Jean Clandinin, the researchers who maintain the rapport based on the continuous relationship and trust with the participant novice teachers interviewed them to listen to their life story. The group interview was conducted after one year so that it would serve as a place for cooperative re-telling and listening to each other's lived experience.

In the narrative of re-telling, deeper reflections, which had not been verbalized in the previous interviews, on their early teaching experiences were expressed through different perspectives and a new analytical framework. In this cooperative narrative enterprise, each novice teacher clearly expressed their ideal teacher image and the ideal class image along with their self-understanding.

研究分野：教育方法学

キーワード：初任期教師 教師教育 ナラティブ・インクワイアリー 語り直し

## 1. 研究開始当初の背景

近年、我が国では、大量の教員の退職とそれに伴う大規模な新採用教員の配置の結果、学校現場において、多くの教育現場における初任期の教員の割合が増加するとともに、学校現場での教員の力量形成のあり方が喫緊の課題となってきた。しかし、近年の学校現場では教師の多忙化が進行しつつあり、それと並行するかのように教員人材の消耗（離職・休職）が問題となってきた。今日新たに入職した教師のあり方には、こうした背景が反映されて様々な姿で現れてくると考えられる。そこで、入職2年目～4年目の教師の経験をナラティブ的探究(narrative inquiry)の方法で教師に内在する視点から捉え、新人教師一般に還元され得ない教師と学校に固有の要素が、個々の教員の力量形成にいかに関与し、どのような困難をもたらしているかを明らかにしたいと考えた。

研究者との持続的で信頼に基づいたナラティブ的探究の関係の中でこそ、より長いスパンの経験を自分史のスタイルで語る事が可能になる。それを通して、それぞれの学校現場における教師個人の発達がどのように起こり、そのサポートはどのように機能し、あるいは機能し得ずにいるかを可視化することができると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、現在初任期を生活している教師の語りの分析を通して、初任期における若手教師の経験と成長の様相をとらえること、とりわけほぼ一年の時を置いて初任期の経験を語り直すことで明らかになった教師の省察の深化を叙述、考察することを目的としている。

学校現場において若手教師の経験の省察を促し、その専門的成長を支えることは喫緊の課題である。とりわけ初任期の経験は、その後の教職生活を大きく規定すると言われている。そのため、教職五年以内の教師の経験を、教師に内在する視点からとらえ、個々の教師に固有の要素を踏まえて、教員の専門的成長にそれらがいかに関与し、どのような変容の契機をもたらしているのかを明らかにすることは、理論的かつ実践的に価値のある研究課題であると考えられる。

## 3. 研究の方法

本研究は、克蘭ディニン(D. Jean Clandinin)のナラティブ・インクワイアリーを援用し、研究者と研究参加者(ここでは教師)の持続的で信頼に基づいた協同の探究の関係の中で、空間的・時間的広がりを持つ経験を自分史のスタイルで語るだけでなく、社会的な文脈に基づいて研究者との密接な関係性の中で語り直すことを通して、語り手の経験を「動きの中で」とらえ、新人教師一般の経験に還元されない個々の教員の成長の契機に光を当てることを目的としている。

従って第一に、個々の教師の実践と生活の場に近く緊密な関係を保つ研究者をパートナーとして、個人が語るオートバイオグラフィー(自分史)に立脚することにより、いわゆる初任期の経験が、個人が教師という職業をめざし教師として生きる決定をする、その個人のライフコースにおける一つの重要な時期としてクローズアップし、再定義することをめざした。X県の公立学校に勤務する教職3年目の教師3名を対象に、克蘭ディニンのインタビュースケジュールを参考にし

た 16 項目による半構造化インタビューを実施した。調査対象の 3 名は、小学校に勤務する女性教諭 A、小学校に勤務する男性教諭 B、中学校に勤務する男性教諭 C である。

第二に、インタビュアーとインタビュー者が一対一の自伝的なインタビュー調査を行い、その後約一年をおいて、再度語り直すインタビュー調査を、グループ・インタビューの形で行った。

Z 県および Y 県で公立小学校に勤務する入職 3 年目の教師たちを対象として、インタビュアーとインタビュー者が一対一の自伝的なインタビュー調査を行った。初回のインタビューに応じてくれた教師の中から、友人である二人の教師を選んで、その後一年以上おいて、同じインタビュアーが、初年度と同じ質問を含みながら、教師としての経験を再度振り返るインタビューを行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 若手教師の経験と成長の契機

教職 3 年目の教師の半構造化インタビューによるこの研究では、若手教師の成長を支える契機に焦点を当てて分析を行った。

教職 1 年目の経験から影響を受けた事柄として共通して挙げられたのは、初任者研修の一環としての指導教員とのやりとりの意義深さであった。教師としての成長に確かに役立っていることが窺われる。また、成長を感じられる契機となっているのは、役割や仕事を任されることである。分掌であれ、行事であれ、自分だけの役割や仕事を任されることが認められている感覚に繋がり、さらには、学校組織の一員として尊重されている感覚に繋がっている。失敗の経験も初任期の教師にとっては大きな成長の機会となっていた。

自分の支えとなっている人の繋がりについては、学生の頃から現職教員と関わる機会の多かった C を含めて、年齢の近い同僚や大学時代の友人がまず挙げられた。これらの同僚や友人は自分の教師としてのキャリアのほぼ同じ場所に位置しているため、支えとなっていると実感されやすいのであろう。その一方で、年長の同僚との関わりには戸惑いや遠慮を感じる傾向が認められる。大量の教員の退職期を前に、どうすれば世代を超えた学びが容易になるのかも、今後の調査の課題となる。

##### (2) 語り直しから見る 若手教師の経験と成長

語り直しに表れる教師の成長に焦点を当てたこの研究において、初回のインタビューは、「新任教師」というカテゴリーによってインタビューの属性を予め性格づけることを避けるため、単に教師としての初任期の経験を尋ねるのではなく、一人の個人が教職をめざしてきたより長期のライフストーリーをききとりの対象とした。

それぞれの教師は、個性的な経験に基づいて、入職の時点ですでに目指す教師像や学級像をもっており、それがどのように形成され今日の実践を支えているかが、子ども時代から今日までの経験を自伝的に語る中で表れてきた。また、そうした教師のアイデンティティの語り、決して標準的なものさしで測ることのできないそれぞれの教師の力として、個々の実践の基盤を成していることがうかがえる。教師の成長というものが、いかに息長く個性的な道筋をたどって成されるものであるかを、ナラティブ・インクワイアリーは描き出すのである。

初回の個別インタビューでは、ともに暖かい良い職場であるという認識が表現されていたが、職場の同僚性や教師を支える環境という点では違いがあり、それは協同の語り場において、語り直しを通してより明らかに認識されることとなった。

入職一年目で経験した、非常に難しい対応を求められたケースについて語り直した教師は、自らの実践や環境について省察的に理解を深め、教職をずっと続けると言い切れなかったほどの初年度の経験の苦しさについて、複眼的に見直していた。「乱暴な子ども」と叙述されていた児童については、その子どもが自分の親について語った言葉に基づいて、子どもが母親の言葉と態度の矛盾を感じ取っていると、子どもの視点からその子の問題をとらえ直した。また、そうした子どもを指導しようとする教師への学校全体でのサポートが十分でなかったことも、管理職の言葉を引きながらとらえ直している。また、クラス委員の親たちが学級に入ってくれたことも新たに言及し、思わぬサポートがあったことをとらえ直している。親しい仲間にもこれまで説明することもできずにいた初任期の経験について、グループインタビューでの語り直しにおいては、このように俯瞰するようにとらえ直すことができていた。

他方、最初のインタビューでむしろ「調和した語り」であった教師は、グループインタビューにおいては、それを「ひび割れのある語り」へと変容させていた。人々が困難な経験を語るためには、例えば半年というような時間の経過が必要だと言われるが、第一回目の語りには、まだ困難な経験を語る準備ができていなかったのかもしれない。

### (3) まとめ

長い教職キャリアにおける初任期は、やはり特別な時期だということである。初任期は、単に教職の開始期であるだけでなく、教員養成から教職キャリアへの移行期でもあるが、それは、養成期の終点から初任期の始点へとというような単純な移行ではない。初任期というのは、養成期の終わりが初任期の始まりのある時点まで一定程度引き延ばされ重なり合う時期であり、養成期に得た知識や経験の記憶が色濃く残っている時期である。

養成期の学生を、単に教員養成の「客体」として見るのではなく、職業として教職を自ら選び、教師として成長していく「主体」として捉えることも重要であると言える。

若手教師の成長には、揺らぎの克服だけではなく、揺るぎのなさから揺らぎが生じるというベクトルもあった。こうした変容は教師のものの見方と人間としての幅を広げる上で大切な役割を果たすと考えられる。

ある時間を挟んでの語り直しと同じ境遇にある仲間との協同の語り、および語り直しによって、個々の教師が以前には言語化されなかった内容を新たな言葉でとらえ直しを促すことが示された。語り直しが促した省察は、一度目の語りよりも広い視野で問題をとらえ、同一の出来事を異なる仕方と捉え直すことができただけでなく、子どもや保護者の立ち位置に寄り添い複数の視点で問題を描き直したり、自己の教育実践を異なる視点から省察しなおしたりするものとなっていた。また、新たな自己理解に至ることもできていた。

こうしたナラティブ・インクワイアリーにおける語り直しは、教師の成長のありようを克明に描く方法であるだけでなく、それ自体に実践的な意義があることが明らかにな

った。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

桂直美・高井良健一・伊藤安浩「初任期における若手教師の経験と成長 -語り直しを通しての省察の深化-」、『東洋大学文学部紀要第 71 集 教育学科編』第 L 巻、pp.23-31、2018.3 (査読無)

伊藤安浩・桂直美・高井良健一「初任期における若手教師の経験と成長のモノグラフ(1) -第 1 回インタビュー調査の分析を通して-」、『大分大学教育学部研究紀要』第 38 巻第 2 号、pp. 63-78、2017.3 (査読無)

[学会発表](計 3 件)

Naomi Katsura, Music Education as Human Education: The Ethos of Suzuki Method Teachers' Community, American Educational Research Association, Annual Meeting 2017.4.29, San Antonio, U.S.A.

Naomi Katsura, The Suzuki Method in School The Southwest Educational Research Association, The 40th Annual Meeting, 2017.2.16 San Antonio, U.S.A.

高井良健一、高等学校における授業研究がもたらす新任教師の変容、日本教師教育学会、2015 年 09 月 20 日、信州大学

[図書](計 1 件)

金子奨、高井良健一、木村優 編、『協

働の学び」が変えた学校』、大月書店、2018 年 03 月 15 日

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

桂 直美 (KATSURA, Naomi)  
東洋大学・文学部・教授  
研究者番号：50225603

### (2)研究分担者

高井良 健一 (TAKAIRA, Kenichi)  
東京経済大学・経営学部・教授  
研究者番号：50297339

伊藤 安浩 (ITO, Yasuhiro)  
大分大学・教育学部・教授  
研究者番号：90284778